

# INTERSECTION

INK

———今、あなたの頭に思い浮かぶ風景は、何ですか。

その薄くも深くも無い色彩を帯びた眼精は、横断歩道の歩行者信号を見つめていた。赤、緑、赤、緑。つまらなさすぎる程の二つの同色をじっと見つめ、直立不動の男と両手両足を不自然に硬直させて動いているフリをする紳士形の白い点灯を見据える。不意に、発光していた赤が青の方に変わると、少女は自分の周りの人々が一斉に動き出し始めたのを感じ始める。黒い影、小さい影、靴音、車のクラクション、規則正しい歩行者と進行音。

少女は長い髪をしていた。その色も、肌の色も、身長も容貌も日本人的なものを感じさせる。証拠に、立ち止まっている彼女を珍しげに振り返る者や顧みる者はいないに等しい。少女は、固くて人工的に整備された道路をブーツの裏でカツンと踏み、それをもう三度ほど繰り返したところで、立ち止まる。このままの状態では誰かが少女の身体と衝突してしまうのを免れない。それほど少女の周りにおいて人が群集しているのだ。

しかし、少女の唇が僅かに動き、そしてその白く細長い手を空中に投げ出した。形の良い爪がきらり、と太陽光に薄く反射する。その途端に、全ての人という人、車、点滅する信号、何もかもが動きを止める。道路脇の木の下も鳥も風も、空の雲の流れも全てが動作というものを停止というものへ変化させた。

「サライ。その能力を使うことは禁じられているだろう」

直後、少女の直ぐ後ろに立った黒影から低い声が響いた。サライと呼ばれた少女は、黒い睫毛に覆われた瞳を肩越しに背後に向ける。その瞳は、花が咲いているような、万華鏡のような人ではない輝きと光彩を放っていた。

「どうせ、あなた以外は分からない」

少女から零れた声は、高くも低くもない声だ。騒音に紛れれば、透き通ることのないこの声は簡単に掻き消されてしまうだろう。

しかしこの空間、全ての動き、音が止まった喧騒を忘れた都会においては、静寂を打ち破る唯一の音に違いなかった。

「迷子になったからって、力を無暗に使うな。お前を心配する俺の身にもなれ」

「だって、こうでもしなくちゃ私を見つけるなんて無理だよ」

「携帯という物がある」

「お金がかかる。時間も勿体ない。それに機械は苦手」

「あのなあ、サライ」

溜息交じりに嗜めるような声に、少女は顔を顰めて黒影と向き直った。

彼女の瞳に見据えた人は、日本人的な容姿を持つ男の姿だ。黒いスラックスに白と青のストライプのシャツを着こなした男は少女よりも背が高く、心配そうな二つの大地色は少女をしっかりと見つめて放さない。

「私に説教するの」

「そうだ」

「怒っているの」

首を傾げた少女の髪が、肩から滑り落ちる。眼鏡をかけた男は、少女の小さな頭をその大きな掌でやさしく撫でた。

「少しだけ」

「どうして？」

「分かるだろう」

落ち着いた男の声の内容は、暈す様な答えだ。少女は少し考えるふりをして、肩を落とす。瞬間、喧騒の渦が二人の身体を包み込んだ。

少女と男を過ぎ去ろうとする人達とぶつかりそうになるが、男が少女の手を引いて進行方向と同じ方向へ進むことで無事免れることとなった。

「いい子だ」

男の納得したような笑顔を見て、少女は安心したようにほっと胸を撫で下ろす。不意に、男がシルバーのフレームの付いた眼鏡を外すと、確かに大地色を保っていた瞳が淡く発光し始めた。小さな手を掴んでいた大きな手に、ぎゅっと力が込められる。

「掴まっている」

「ナオ」

呼ばれた男は振り返る。何だ、と質問してくるような男の視線に、少女はあどけない顔をして笑って答えた。その頬はほんわりと紅潮している。

「見つけてくれて、ありがとう」

焦げ茶のつぶらな瞳を真っ直ぐに受け止めて、男は照れた様に顔を背ける。そして直後、喧騒の渦が溶け込んだ空間において、群集する人の中に居た男女の姿が音も無く消えたことに気付く者は、一人もいなかった。

—————あなたが思い描いた世界に、あなたの大切な人がいてくれますように。

